

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成23年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム
「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」
研究開発プロジェクト
「高齢者による使いやすさ検証実践センターの開発」

研究代表者 原田 悦子
(筑波大学人間系心理学域 教授)

1. 研究開発プロジェクト名

高齢者による使いやすさ検証実践センターの開発

2. 研究開発実施の要約

本プロジェクトは、健康で独立した生活を営む高齢者の生活の質を高め、又それを低負担で支援できるシステム創成の必要要素として「高齢者にとっての使いやすさ」を取上げ、それを実現したものづくりの支援・促進を目的とする。そこで高齢者自身が社会貢献として自発的に参加する「使いやすさ検証実践センター(Center for Usability and Aging Research; CUAR)」を構築し、同時に使いやすさと認知的加齢の関係、コミュニティによる人工物利用支援、人工物利用のための支援ツール作成をターゲットとした研究活動を実施していく計画である。

初年度であるH23年度は、CUAR設立を中心として活動を行った。まず、事務所・組織としてのCUAR設置、高齢参加者の登録データベースの構築とその方法論の決定、参加者の募集・登録を開始した。併せて、もう一方の「CUAR利用者」であるメーカー・サービス提供者との関係性についても議論を重ね、「みんラボパートナー制度」としてのコンソーシアムの設置計画に着手しつつある。

参加者データベース登録はH23年度2月中旬より開始し、3月末時点で50名強と初期目標(200名登録)の25%程度を達成し、認知的加齢と使いやすさ研究の初期的な分析の基盤を作りつつある。こうした参加者募集の裏では、広く呼びかけを行っていくために、地方自治体ごとの各種窓口(市役所、シルバー人材センター、社会福祉協議会など)との間の密な連絡体制を必要とし、「コミュニティの中での組織づくり」を実感しつつ、実践している。

人工物利用支援ツール研究グループは、こうした参加者による「在宅での継続型ユーザビリティテスト」のためのツールとして、継続的な操作ログ記録システムの基礎技術を開発・試作した。次の「実際のユーザによるパイロット研究」実施に向けて、システム統合と各種条件下でのテストと問題検討を行っている。

コミュニティとしてのCUARをいかに作り、介入していくか、については、「人工物利用とコミュニティ」研究グループが担当しており、対照群としての農村部コミュニティでの人工物利用状況の分析との比較をしながら、いかにして「コミュニティ創生のための介入」を行っていくか、具体的な検討に入ろうとしている。

これらの準備状況をふまえ、H24年度よりいよいよ実際の活動・研究を進めていく予定である。

3. 研究開発実施の具体的内容

(1) 研究開発目標

本研究は、健康で独立した生活を営む高齢者の生活の質を高め、又それを低負担で支援できるシステム創成の必要要素として「高齢者にとっての使いやすさ」を取上げ、それを実現したものづくりの支援・促進を目的とする。具体的には、

- a) 高齢者自身が社会貢献として自発的に参加する「使いやすさ検証実践センターCUAR」を構築し、
そこでの活動から、
- b) 個別の対象システム・対象機器の使いやすさに関する使いやすさ検証とデザイン改善に関する提案、

- c) 複数の対象システム・機器に共通する「高齢者にとっての使いやすさ」をもたらす認知的機制ならびにそれへの対応策に関する研究成果、
 - d) CUAR で新たに構築される参加高齢者によるコミュニティと既存コミュニティとの関係性、その特性と効果、解決すべき問題と対策に関する研究成果、
 - e) 既存、あるいは新たに構築されるコミュニティを前提とした「使いやすさ」研究/機器利用支援のための支援ツールの作成、
 - f) こうした新しい高齢者コミュニティの創成/運営をよりよいものとしていくためのCUAR センター作成・運営技術に関する研究成果、
- を得ることを目的とする。

（２）実施方法・実施内容

本プロジェクトでは、高齢者が感じる「使いにくさ・使いやすさ」についての情報を、常時、提言・収集可能な環境を作るために、「高齢者による使いやすさ検証実践センター Center for Usability and Aging Research (略称: CUAR)」を開発することとした。これは、恒常的に広範な高齢者を対象としたユーザビリティテストが実施できるような環境を整え、また一般の地域在住高齢者に広く参加者を求めて参加者データベースを構築、テスト対象となる人工物（製品・システム）に最適な高齢参加者を抽出して体系的にテストを実施し、その成果を総合的に検討して、より一般性のある「使いやすさ」及び「高齢者にとっての使いやすさ」の諸問題を検討していくことを活動の基盤とするものである（図1参照）。また、そこで構築される参加者データベースを基に、認知的加齢と実際の使いやすさとの関係性分析を体系的に行うことにより、「高齢者にとっての使いやすさ」に関する独自の問題について研究を進めていくこととした（主として「認知的加齢と使いやすさ」研究グループ）。

一方で、データベース登録者に対し、ユーザビリティテスト以外にも、グループインタビューや討論会、講習会などの参加イベントを企画し、参加を奨励することにより、本センターの基本理念であるユニバーサルデザインと「使いやすさ検証」による高齢者の社会貢献という考え方を共有していくこととした。またCUARの運営において「高齢者にとっての使いやすさを実現していくために、どのようなコミュニティ活動が可能か」を参加者自身と議論を進めていくChange Laboratory方式を取り入れ、「社会にとっての使いやすさを実現する担い手として」の高齢者の活動を組織化することを目指す。すなわち、プロジェクト自体の趣旨を主体的に理解し、協力していく活動者として高齢参加者を位置づけ、そこでの自由な活動を通して、自己効力感や社会へのつながり感を醸成していくことを目的としたいと考えた。このため、「人工物利用とコミュニティ」研究グループについては、CUARのコミュニティとしての活動（特にChangeLab活動など）についての議論を行い、準備を進めると同時に、H23年度は対照地区である山形県三川地区での農業技術グループについての観察、データ収集分析を行うこととした。

これらの活動のために「人工物研究支援ツール」研究グループでは、テストのデータを記録するためのロギングツールや、コミュニティ活動を支援するコミュニケーション支援ツールを整備・開発していく。特に家庭内で利用する人工物について、ユーザにとって親和性の高い評価支援ツールの開発が行われることによって、高齢者のための見守りシステムや遠隔コミュニケーションシステムの設計指針となる知見も得ていくことができる。このため、一般性を持つロギングツールとして小型カメラ、マイクロフォン、人感センサー

等を利用して構成していくが、実際にプロジェクトを支援しながら、本当に必要とされる機器構成とコストや大きさの問題、高齢者にとっての使いやすさや記録される事に対するプライバシーの問題等を分析していくアプローチを取っていくこととした。

こうした一連の研究活動を実現していくために、いかにCUARという組織を構築・運営していくか、アクションリサーチの一環として「使いやすさ評価組織運営」研究グループとして実践を行った。

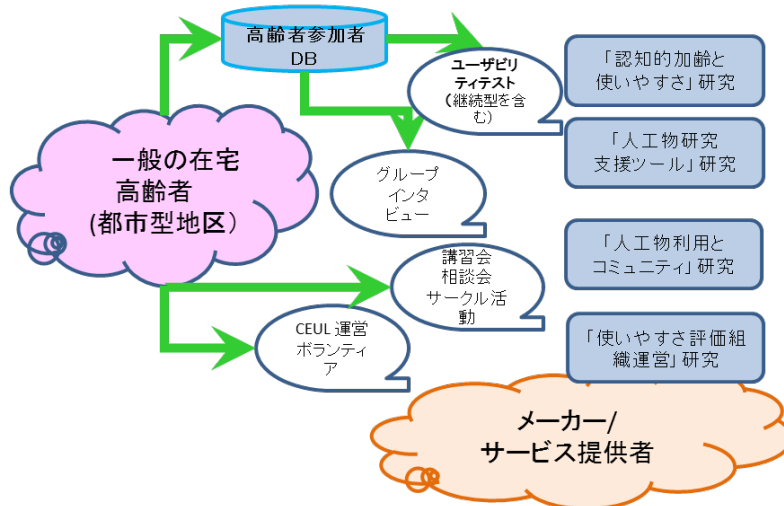


図1 高齢者による使いやすさ検証実践センター(CUAR) 概念図

(3) 研究開発結果・成果

「認知的加齢と使いやすさ」研究グループ＋「使いやすさ評価組織運営」研究グループ

初年度であるH23年度は、主としてCUARの立ち上げ準備期間とし、その設置について主として「使いやすさ評価組織運営」研究グループおよび「認知的加齢と使いやすさ」研究グループが協力して実行した。具体的には、

(1)CUAR設立

つくば市の中心となる駅から徒歩圏内に、CUARの場所を定め、ユーザビリティテスト室の設計を含め、CUARを構築した（図2）。



図2 CUAR（みんラボ）の様子：外観，コミュニティスペース，テスト室内

また同時に組織としてのCUARの整備を行った。現在、2名の専従者(特別研究員、ならびにラボマネージャ)を含め、合計10名のコアメンバーを中心に、CUARの運営を行っている。

CUARという名称は研究組織であるが、参加者となる高齢者には馴染みにくいものと考えられる。そこで、「みんなの使いやすさラボ」略称「みんなラボ」という名称とし、ロゴを策定した(現在商標登録申請中;図3)。



図3 「みんなラボ」ロゴ・タイトル(商用登録中)

CUARの活動を発信していくWebサイトは現在暫定版をオープンし、随時作成中である(<http://tsukaiyasusa.jp/project/>) が、特に高齢参加者のための紹介サイトについては先行してオープンした(<http://tsukaiyasusa.jp/>)。

(2) 参加者データベースの設計・構築・登録開始

高齢参加者用の参加者データベースとして、一人一時間ほどの面接で登録ができる形でのデータベースを構築した。面接は個別に行われ、プロフィール情報(学歴、職業歴、健康状態など)、人工物利用状況(所持・利用・困難度の認知)、情報化・コンピュータに対する態度などの他、MMSE/老研式活動指標/AIST版認知的加齢テストなどを実施した。また、CUAR内のコーヒーメーカーを題材として簡便なユーザビリティテストを実施し、その内省インタビューと共に、こういった活動をしていくのかを説明する事例としている。

すべてのデータはコード化され、個人情報とは別に保存されている。当該手続きについては、筑波大学人間系研究倫理委員会の承認を得て、参加者の同意の下で実施している。

H24年2月より参加者登録を開始し、3月末時点で50余名の登録を行った(H24年4月末現在78名)。全体として男性が多く(男性49名、女性29名)、年齢層は前期高齢者中心である(68.8%)。女性比率が低いためか、独居は8.8%と(全国平均に比べ)低く、夫婦のみ世帯が55.7%である。教育年数がやや高い(平均14.04年、SD 2.52)、またPC所有者が87.1%(そのうち、5年以上前からPCを利用している人が87.3%)と、つくば市というコミュニティ、また「社会貢献として、自分の感じる使いやすさについて話をしてほしい」という呼びかけに最初に応えた参加者であるということから、ややサンプリングに偏りがある可能性がある。次年度以後の募集活動において留意すべきと考えている。

(3) CUARの運営を考えたとき、モノづくりの立場からCUARを利用・支持する企業・サービス提供事業者との相互連携の必要性が強く認識されるようになり、議論の結果、「みんなラボパートナー」として情報交換・共有をしていくコンソーシアムを立ち上げてはどうか、という成果を得た。H23年度は準備期間とし、H24年度に制度化、募集をし、活動を開始する予定である。

「認知的加齢と使いやすさ」研究グループ

CUAR設立と平行して、「認知的加齢と使いやすさ」研究グループでは、参加者データベースに基づく認知的過程検討を行うべく、情報収集・データ整理および具体的な研究計画について議論を始めた。現時点では、特に登録時のコーヒーマーカーユーザビリティテストの結果と他の諸要因との関係分析についての検討を始めている。加えて、人工物利用学習の際に重要な要因として「順序の理解・順序情報の保持」があるとの仮説から、新たにdTOJ課題（両耳順序判断課題；dichotic Temporal Order Judgment Task）を開発し、データベース登録項目の一つとして組み込んだ。さらに、加齢に伴う認知過程変化の仮説に基づき、新しい指標、テスト方法を検討していくための議論を行いつつある。

「支援ツール」研究グループ

H23年度は、家庭の家電利用を記録する、継続型ユーザビリティ用ロギングツールの開発に着手した。本ツールでは、家電を改造してボタン押下時の信号を直接取得する方法、家電の下に設置した圧力センサー台（図4）でボタンを押す強さや長さを検出する方法、画像処理によってボタンの位置を検出する方法を併用する。これらのセンサーによって取得されたデータは、ボタン操作映像と音声とともに記録される。その後、これらのデータを動作分析用ソフトウェアを利用して一括して閲覧する環境が提供されるため、あるボタンが押されたときの発話やその前後の操作手順などを簡単に検索・分析することが可能となる。また、圧力センサーという新しい記録ツールを用いることにより、操作ボタンを押す力や長さからユーザの操作熟練度や“いらだち”、急いでいる様子など、従来は分析対象とされてこなかった心的状態の推定にも利用できると考えられる。こうしたデータは従来、生理指標によってのみ検討が可能であろうと考えられてきたが、シンプルな操作データを継続的かつ統合的に収集することにより、研究参加者への負担を増大することなしに利用状況の新しい分析可能性が開かれているものと考えられる。なお、これらのデータは無線ネットワークを介して遠隔から取得できるようにし、家電製品を貸し出し中であっても、任意のタイミングで分析ができるようにしていく。H23年度末に基本要素の試験機が完成し、現在、実家庭での継続型利用の予備実験に向けて、調整・テストを行っている。

一般家庭に本装置を貸し出す場合、装置の不具合が生じたり、家電の使い方がわからなくなったりした場合に対応できるように、Skype等のビデオコミュニケーションソフトウェア利用した遠隔支援機能も準備する。これらの機能を市販の家電ラックに組み込み、家庭に貸し出すことによって、家庭内・遠隔ユーザビリティテストを実現する予定である。

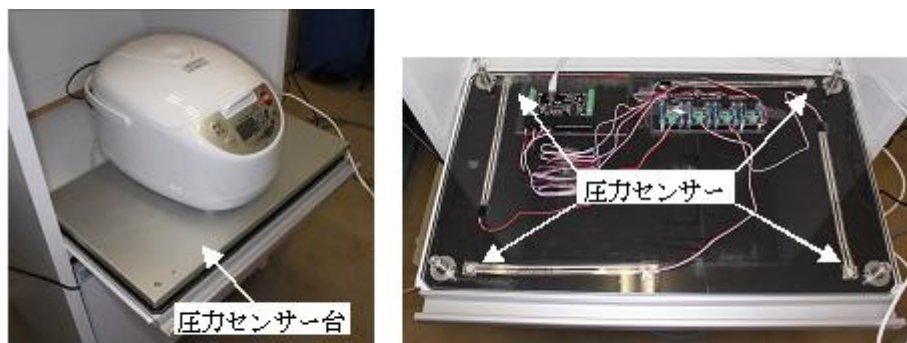


図4 圧力センサー台の外観(左)と内部の回路(右)

「人工物利用とコミュニティ」研究グループ

H23年度は、次の2点を実施した。①山形県庄内およびつくば市の高齢者にインタビュー調査を実施し、高齢者の社会的な活動実践の実態に関する資料をえた。半構造化面接法で、高齢者が所属、関係するコミュニティについて、談話資料を収集した。質問項目は、コミュニティの種別、活動内容、参加の動機、日常生活との関連、使用するソーシャルメディアの種別等であった。②高齢者による機器利用に関する壁新聞型の情報交換ツールの開発を目指して検討した。

①については、高齢者のコミュニティ参加には、高齢者の年齢、職業、家族構成の特性等によって、かなりのバリエーションがみられた。また機器利用は、何を目的とした活動に従事するかによって利用する機器の種類や、頻度も決まってくるという感触を得た。今後は、サンプル数を増やして、つくば市ならびに山形庄内の高齢者コミュニティ同士のつながりを描き出す。②に関しては、タブレット型機器をベースにした、手帳型壁新聞ソフトを構築した。WordPressというオープンソースのブログとそのプラグインBuddyPressを設置して構築した。また、このシステムを、どのようにコミュニティの活動に埋めこめるか、SNSなどでやり取りしてもらえるか、議論した。今後具体的に、②-1 つくば市内の既存の高齢者コミュニティ情報を収集していき、②-2 その中から、当該の壁新聞ソフトによる「コミュニティ内部・情報共有や外部・情報発信」を必要とする／適するコミュニティを特定して協力関係を築き、②-3 そのコミュニティの活動にマッチする形に壁新聞ソフトを改良・活動に介入していくアクションリサーチ的な活動を行うことで、コミュニティの発達や組織学習に介入する予定である。

(4) 会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2011/09/19	第1回コアメンバー事前打合せ	HQL 東京事務所	今後の活動方法決定
2011/09/21	実験参加者データベース登録制に関する打合せ	玉川大学	玉川大学「赤ちゃんラボ」見学会を兼ねる。データベース管理に関する概要方針決定
2011/09/25	シンポジウム打合せ	東京大学 (認知科学会会場)	日本認知心理学会公開シンポジウム(2012年3月3日)打合せ
2011/09/28	第2回コアメンバー事前打合せ	つくば市	CUAR 事務所候補地検討会(第1回目)を兼ねる
2011/10/08	CUAR 事務所設置打合せ	つくば市	CUAR 事務所候補地検討会(第2回目)を兼ねる
2011/10/21	アドバイザー委員との懇談	JST	支援ツールの研究計画について
2011/10/22	シンポジウム打合せ DB 構築打合せ	明治学院大学	DB 内容・概要決定
2011/10/26	グループ間研究打合せ	筑波大学	加齢班+コミュニティ班研究打合せ

2011/10/28, 11/12, 17	CUAR 事務所設 置・打合せ	みんなラボ	CUAR 事務所／テスト室改装工事打 合せ
2011/11/18	DB 構築打合せ	みんなラボ	DB 内容・項目詳細打合せ
2011/11/25	グループ間研究 打合せ	筑波大学	加齢班＋支援ツール班研究打合せ
2011/12/06-20	CUAR 事務所設 置・打合せ	みんなラボ	CUAR 事務所 設置打合せ
2011/12/17	研究会(人工物利 用とコミュニテ ィ研究グループ)	筑波大 大塚 キャンパス	自然発生的な活動・実践に関する理 論的な議論
2011/12/20	DB 構築打合せ	みんなラボ	DB 項目内容詳細, 登録手続き打合せ
2011/12/21	オープンラボ コアメンバーMtg (第0回)	みんなラボ	研究グループの全関係者によるオ ープンラボ 活動報告と今後の計画検討
2011/12/22	グループ間研究 打合せ	みんなラボ	加齢班＋支援ツール打合せ
2012/2/11	研究会(人工物利 用とコミュニテ ィ研究グループ)	東京都市大 学	手帳型壁新聞ソフトの開発に関す る議論
2012/2/13	DB 登録打合せ	筑波大学	DB 登録作業研修会
2012/2/17	第1回定例 MTG	みんなラボ	活動報告と今後の計画検討
2012/3/12	商標登録打合せ	筑波大学	みんなラボ商標登録について打合せ (大学知財管理部門と協議)
2012/3/16	第2回定例 MTG	みんなラボ	活動報告と今後の計画検討
2012/3/24	研究会(人工物利 用とコミュニテ ィ研究グループ)	筑波大 大塚 キャンパス	自然発生的な活動・実践に関する理 論的な議論

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

「認知的加齢と使いやすさ」研究グループ、「使いやすさ評価組織運営」研究グループ

茨城県つくば市および県南地区の広い範囲の地域居住高齢者に広く参加を呼び掛けるため、市役所・シルバー人材センター・社会福祉協議会・シルバークラブなど、各種窓口働きかけ、本プロジェクトの意義と目的をお伝えすると同時に、参加者募集への協力を依頼しつつある。

また、みんなラボパートナー制度の設立に向けて、若干の民間企業・NPOと議論を行い、コンソーシアム制という形をとることとした。

「人工物利用とコミュニティ」研究グループ

つくば市内の高齢者グループ、コミュニティに手帳型壁新聞システムを提供して、利用してもらうために、どのような活動グループが有るかの、基礎的資料を収集した。

5. 研究開発実施体制

(1) 「加齢と使いやすさ」研究グループ+「使いやすさ評価組織運営」研究グループ

① 原田悦子（筑波大学人間系心理学域 教授）

② 実施項目：

- CUAR（みんなラボ）の設定・運営
- 参加者データベースの設計・構築，登録，運用
- ユーザビリティテストの実施およびその方法論に関する研究の実施
- 認知的加齢と「高齢者にとっての使いやすさ」に関する実験研究の実施

須藤智 静岡大学大学教育センター 専任講師

高橋美和子 一般社団法人人間生活工学研究センター 東京事務所長

近藤公久 ATR知能ロボティクス研究所 研究員

安達悠子 筑波大学大学院人間総合科学研究科 特別研究員

萩野真由美 専任事務職(ラボマネージャー)

(2) 「支援ツール」研究グループ

① 葛岡 英明（筑波大学システム情報系、教授）

② 実施項目

- 人工物利用のロギングツールの開発
- 人工物利用を遠隔支援するツールの整備

山下 淳 筑波大学 講師

Madhumita Ghosh 筑波大学 博士後期課程

今村 隆雄 筑波大学 博士前期課程

申 恵容 筑波大学 博士前期課程

(3) 「人工物利用とコミュニティ」研究グループ

① 茂呂雄二（筑波大学人間系、教授）

② 実施項目

- つくば市、山形県庄内地方の高齢者グループのネットワークの質的調査
- 手帳型壁新聞システムの開発

上野直樹 東京都市大学 教授

香川秀太 大正大学 専任講師

藤 圭 筑波大学 助教

6. 研究開発実施者

研究グループ名：「認知的加齢と使いやすさ」研究グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
○	原田 悦子	ハラダ エツコ	筑波大学人間系	教授	総括 認知的高齢化と使い やすさ研究
	須藤 智	ストウ サトル	静岡大学 大学教育センター	専任講師	認知的高齢化と使い やすさ研究実験評価
	高橋 美和子	タカハシ ミワコ	一般社団法人 人間生活工学研究センター	東京事務所長	使いやすさ評価組織 運営研究
	近藤 公久	コンドウ タダヒサ	国際電気通信基礎技術研究 所知能ロボティクス研究所	主幹研究員	参加者データベース 構築利用
	石本 明生	イシモト アキオ	(株)HALデザイン研究所	代表取締役	使いやすさ評価実験 の実施と分析
	澤井 大樹	サワイ ダイキ	株式会社 イデアラボ 筑波大学大学院 人間総合科学研究科	代表取締役 博士課程後期 学生	参加者データベース 構築利用
	安達 悠子	アダチ ユウコ	筑波大学大学院 人間総合科学研究科	特別研究員	使いやすさ評価実験 の計画・実施・分析
	萩野 真由美	ハギノ マユミ	筑波大学人間系支援室	非常勤事務職	使いやすさ評価組織 運営事務
	伊藤 真利子	イトウ マリコ	筑波大学大学院 人間総合科学研究科	博士課程後期 学生	使いやすさ評価組織 運営支援
	新井田 統	ニイダ スグル	筑波大学大学院 人間総合科学研究科	博士課程後期 学生	使いやすさ評価実験 の実施と分析
	Polong Lin	リン, ポーロン	筑波大学大学院 人間総合科学研究科	博士課程前期 学生	使いやすさ評価実験 の実施と分析
	松崎 照輝	マツザキテルキ	筑波大学大学院 人間総合科学研究科	博士課程前期 学生	使いやすさ評価実験 の実施と分析
	宮代 こずゑ	ミヤシロ コズエ	筑波大学大学院 人間総合科学研究科	博士課程前期 学生	使いやすさ評価実験 の実施と分析
	岡田 美鳥	オカダ ミドリ	筑波大学人間学類	学部学生	使いやすさ評価実験 の実施と分析
	大石 優衣	オオイシ ユイ	筑波大学人間学類	学部学生	使いやすさ評価実験 の実施と分析
	山口 一大	ヤマグチ ヒロカズ	筑波大学人間学類	学部学生	使いやすさ評価実験 の実施と分析
	伴野 友美	バンノ トモミ	筑波大学人間学類	学部学生	使いやすさ評価実験 の実施と分析

研究グループ名：「人工物利用とコミュニティ」研究グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
○	茂呂 雄二	モロ ユウジ	筑波大学人間系	教授	総括 高齢者コミュニティ と人工物利用の関係 の検討
	上野 直樹	ウエノ ナオキ	東京都市大学	教授	高齢者コミュニティ と人工物利用の関係 の検討
	香川 秀太	カガワ シュウタ	大正大学	専任講師	高齢者コミュニティ と人工物利用の関係 の検討
	藤 圭	フジ ケイ	筑波大学大学院 人間総合科学研究科	特任助教	ネットを介した高齢 者コミュニティ内コ ミュニケーションの 分析
	ソーヤー 理 恵子	ソーヤーリエコ	東京都市大学	特別研究員	高齢者コミュニティ の創成と人工物利用 の関係

研究グループ名：「人工物利用支援ツール」研究グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職 (身分)	担当する 研究開発実施項目
○	葛岡 英明	クズオカ ヒデアキ	筑波大学システム情報系	教授	総括 高齢者のための使い やすさ研究支援ツ ールの開発
	山下 淳	ヤマシタ ジュン	筑波大学システム情報系	講師	人工物利用支援シ ステムの開発
	Madhumita Ghosh	マドゥミタ ゴッシ ユ	筑波大学大学院システム情 報工学研究科	博士後期課程 学生	人工物利用支援シ ステムの開発
	今村 隆雄	イマムラ タカオ	波大学大学院システム情報 工学研究科	博士前期課程 学生	人工物利用支援シ ステムの開発
	申 恵容	シン トクヨン	波大学大学院システム情報 工学研究科	博士前期課程 学生	人工物利用支援シ ステムの開発

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. ワークショップ等

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2011/10/22	日本認知心理学会高齢者研究部会研究会	明治学院大学	40名	日本認知心理学会高齢者研究部会の研究発表会で発表を行った。 原田悦子「社会実験としての高齢者のための使いやすさ実証センター（CUAR）設立の試み ～認知的加齢，使いやすさ，コミュニティ～」
2012/3/3	日本認知心理学会公開シンポジウム「高齢社会で豊かに生きる：認知心理学の貢献 ー脳，山登り，IT機器ー」	つくば国際会議場	120名	日本認知心理学会主催・みんなラボ共催のシンポジウムとして、広く市民一般に公開された。 講演 原田悦子「「使う」視点からみたデザイン：使えないのは誰のせい？」

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

Webサイトを構築しつつあり、プロジェクト全体については、現在暫定版をオープン（<http://tsukaiyasusa.jp/project/>）、特に高齢参加者のための紹介サイトについては先行オープン（<http://tsukaiyasusa.jp/>）。

7-3. 論文発表（国内誌 1 件、国際誌 0 件）

原田悦子 「みんなラボ，発進」：高齢者のための使いやすさ検証実践センターについて．人間生活工学，13(1)，71-74，2012年3月．

7-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

① 招待講演（国内会議 1 件、国際会議 0 件）

原田悦子「「使う」視点からみたデザイン：使えないのは誰のせい？」日本認知心理学会第3回公開シンポジウム「高齢社会で豊かに生きる：認知心理学の貢献 ー脳，山登り，IT機器ー」 2012年3月13日．

② 口頭講演（国内会議 1 件、国際会議 0 件）

原田悦子「社会実験としての高齢者のための使いやすさ実証センター（CUAR）設立の試み ～認知的加齢，使いやすさ，コミュニティ～」日本認知心理学会高齢者研究部会研究会 2011年10月22日．

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

なし